

# VI. 精神から存在者へ：言文一致運動と大逆事件（1）

## VI-1 法外な世界と《文士》

…人民ノ議論ハ人民ノ精神ノ発スル所ナリ。…然カモ亦決シテ滅尽スベカラザルモノナリ、決シテ破壊スベカラザルモノナリ。国家滅亡スト雖モ喪失スルコトナキモノナリ、山河傾頽スト雖モ変動スルコトナキモノナリ。故ニ政府ノ法制ハ纔(わず)カニ之ガ護衛ヲ為スノ具タル耳(のみ)。…

…国家アレバ則憲法ヲ立テ、以テ之ヲ保全ス可ク、国家ナケレバ則天然ノ智力ト体力ニ依テ之ヲ保護スベク、曾テ之ヲ忽(ゆるがせ)ニス可カラザル也。

植木『言論自由論』愛国社（舎）、一八八〇年五月二七日、『植木枝盛集』第一巻、七二～三、五頁。

- 憲法が發布され、近代国家の形を整えつつあった日本。だが、人間存在は、憲法の幅にはけっしておさまっていない。自由は、暴力と、孤独と、死とに真面目にむきあうときにはじめて自由となる。真の自由は、憲法の外にある。
- ひとつは国家の外部に。こちらは大陸浪人たちがこれを代表するだろう。
- もうひとつは、精神の世界。《純文学》が、憲法制定とともに終わりを迎えた自由民権運動の鬼子として、産声をあげる。法外な場所（アジール）としての、精神。

### 【北村透谷】

旧小田原藩の没落士族に生まれる。自由民権運動に身を投じるも、大井憲太郎率いる朝鮮内政改革運動（大阪事件）に加わるも、活動資金を得るための銀行強盗に絶望して運動を離れ、数寄屋橋教会で洗礼を受けたのち、文学者の道へ。

唯だ夫れこの心の世界斯の如く広く、斯の如く大に、森羅万象を包みて余すことなく、而してこの広大なる心が来り臨みて人間の中にある時に、渺々たる人間眼を以て説明し得べからざるものを世に存在せしむるなり。

…人間の中に存在する心は至大至重のものにして、俗眼大小の以て衡すべきにあらず、学問律法の以て度測すべきものにあらず、小善小仁の以て論ずべきにあらざるを示せしに外ならず。

「各人心宮内の秘宮」1892

◎ 精神の世界は世俗の世界（学問律法）より大きい。

万物自から声あり。万物自から声あれば自から又た楽調あり…何事も何かの声なるべし、何かの声にては分らず何の声ぞと根問ひするはうるさき我友なり。何かの声にて分からねばわからぬにて好し、われはこの何かの声をたのしむこと限りなきものなり。

「幽境の逍遙」1893

文章は筆官の製作とのみ思ふべからず、天地はそのまゝにて一大文章なり。

「電影草廬淡話」1893

◎ 世界はすでに言葉の世界。書物を境にして、一方に世俗の客観的世界が、他方に精神にもとづく主観的世界が形成されているのではない。したがって……

文章即ち事業なり。

「人生に相渉るとは何の謂ぞ」1893

◎ 精神＝言葉は、媒介なしに、出来事である。だから……

吾人は記憶す、人間は戦ふ為に生れたるを。戦ふは戦ふ為に戦ふにあらずして、戦ふべきものがあるが故に戦ふものなるを。戦ふに剣を以てするあり、筆を以てするあり、戦ふ時は必らず敵を認めて戦ふなり、筆を以てすると剣を以てすると、戦ふに於ては相異なるところなし、然れども敵とするものゝ種類によつて、戦ふものゝ戦を異にするは其当なり。戦ふものゝ戦の異なるによつて、勝利の趣も亦た異ならざるを得ず。戦士陣に臨みて敵に勝ち、凱歌を唱へて家に帰る時、朋友は祝して勝利と言ひ、批評家は評して事業といふ、事業は尊ぶべし、勝利は尊ぶべし、然れども高大なる戦士は、斯の如く勝利を携へて帰らざることあるなり、彼の一生は勝利を目的として戦はず、別に大に企図するところあり、空を撃ち虚を狙ひ、空の空なる事業をなして、戦争の中途に何れへか去ることを常とするものあるなり。

「人生に相渉るとは何の謂ぞ」

## VI-2 文学と政治

### ○ 文学と政治——理論と実践？

石川啄木「文学と政治」（『東京毎日新聞』1909年12月19, 21日）

こなひだ戸川秋骨さんが国民新聞へ「文学と政治」の進歩といふことを書かれた。文学の方が遙かに進んでゐるといふ徳田秋江さんの説と、政治の方が遙かに進んでゐるといふ三宅博士の説を引いて、そして戸川さん御自分では、政治も文学も余程複雑なるもので簡単に其進歩を比較する事は出来ないが、漠然と見たところではさまで相違があると思へないといふ御意見を發表されてあつた。…斯ういう比較論が人の話題に上るやうになつたといふのも、文学と實際生活との交渉が余程具体的に考量されるやうになつたといふ事を証明するものである。…ところで、日本現在の文学と政治とは何方が進歩してゐるかといふ問題だが、大した相違がないといふ戸川さんの意見は、大体に於て私も賛成である。が、もう少し詳しく言ふと、政治の方が文学よりも少し許り進んでゐるやうに私には思はれる。

→ 文学と政治（言葉と現実と置きかえてもよい）、どちらが進んでいるか？ ——同じ領域で相争うもの、という奇妙な問い。

## VI-3 言文一致運動——存在のために

ロマン主義的精神が世界において存在するためにはなにが必要か。自然哲学的基盤なしのロマン主義は、永久に空想の世界にとどまってしまうだろうし、政治的な法の世界に敗北し続けるほかないだろう。

→ 他人がいつも、その場にいるとはかぎらない。遠く離れた者たち同士がふれあうために、言葉は存在している。言葉はつねに、手紙なのである。「愛している」という《告白》が実を結ぶためには、内なる（精神の）言葉が、空気中にあふれて形をなさねばならない。そのためには、すくなくとも、言と文とは一致せねばならない。精神に自然哲学的基礎を与える言文一致運動とは、精神の実存の運動に等しい。

### ○ 音声（パロール）と書（エクリチュール）の融合

——消え去るものと残るもの、変化するものと固定したもの、正反対のものを両立させる《文学》者の運動。文学には、文字（記録／残るもの）だけをあつかってきた歴史とは異なる活動領域がある。

Cf. 物集高見『言文一致』1886年3月

文章ハ、話しのやうに、書かねばならぬ、…日本の人のハ、筆から出すのと、口から出すのとハ、別々に、なりてをれば、幾たび、讀みあげても、口の、はなしとは聞えず。

◆ 小説とはなにか？（坪内逍遙『小説神髓』1885~6年）

されば小説ハ、見えがたきを見えしめ、曖昧(おぼろげ)なるものを明瞭(あきらか)にし、限りなき人間の情慾を限りある小冊子のうちに網羅し、之れをもてあそべる読者をして自然に反省せしむるものなり。造物主は天地万象を造りて私なし。恰も我党小説作者が種々の人物を仮作(つくり)りいだして毫末も偏頗愛憎なく、行住進退なべてみなひたすら自然に戻らぬやう写しなせるに似たりといふべし。

小説と正史との間の最も重大なる差別といふハ、脱漏を補ふといふ事に外ならざるべし。…瑣細なる事実をさへ限なく写しい出すことハ、正史のなし得ざる所にして、小説の得意とする所になん。…補遺とハ何ぞや。曰く、正史に漏たる事蹟を補ひ、正史にハ細述せざる当時の風俗、習慣などを見るが如く、描けるが如く、いと精密に写しいだして、一部の風俗史をなすことをいふなり。されば此裨益ハひとり時代物語(過去小説)の専占するところにして、余の小説にハこの事なし。さハあれ世話の小説といへども、後世の人より之を見れば過去小説に外ならざれば、何れにしても小説にハ此裨益あるハ争ふべからず。…史と小説とハ其源おなじ。

- 逍遙によれば、小説は虚構を扱う戯作ではない。歴史の脱漏を補うもの。たんなる虚構を扱うものではない。出来事になる直前で、精神のなかに、あるいは民衆の他愛のない遊戯のなかに消えてしまったものを、もう一度歴史のなかに組み込もうとするもの。

◆ 言文一致とはなにか？

「言〔ことば〕ハ魂なり、文ハ形なり。」——逍遙『小説神髓』

「今日の俗語ハ明日の古語となる。」——山田美妙「言文一致論概略」『学海之指針』1888年

- 無形の精神に形を与えること、それが言文一致運動。
- 掻き消える音声と、記録されなかった出来事との親和性。
- 書き言葉は、たえず変化する話し言葉によりそい、更新されねばならない。

○ 国家の言文一致政策

1880~1900年代：漢字の廃止やローマ字の採用、はては新字の開発にまで議論がおよぶ、国字国語改良運動

- 国字改良会（1898.7 委員は加藤弘之、井上哲次郎、上田万年、矢田部良吉、嘉納治五郎、田中秀穂ら）
- 帝国教育会「言文一致会」（1901.2 会員に上田、上司小剣、嘉納、加藤、菊池大麓、高田早苗、高橋義雄、坪井正五郎、坪内逍遙、徳田秋声、新渡戸稲造、前島密ら）
- 国語調査会（1901.4 委員長に前島、委員に上田、那珂通世、大槻文彦、三宅雪嶺、徳富蘇峰ら）

**But** 保守派の反対運動：

物集高見（反あるいは排言文一致派の代表格、国語擁護会を設立して国語調査会や羅馬字ひろめ会に対抗）

己れが唱へしハ、文語を、口語のまゝに、一途に書くべしといひしにて、更にいへば、記録文と会話文とを区別すべからずといひしなり。是れ誤謬なり。…会話と記録とハ、人称同じからずして、格も、亦た異なるに、時も異同ありて、語尾の趣も相違せるを、いかでかハ、打混じて、一筆に書くを得ん。

「学問の難きに附言文一致の不可能」『読売新聞』1902.12.7~12

- 言文一致運動をスタイルの追求として行なうことのできる《文学》者と異なり、“完成した言文一致体”を求めざるをえない言語学者としては、この結論は正当。諸事実を確定したのものとしてあつかう記録文のもの

っている歴史的な性格と、言文一致そのものがもつスタイルの性格とは合致しない。

Cf. 三宅雪嶺「仮名軍の猛将をして一驚を喫せしむ」「漢字の利害」、有賀長雄「日本教育に於ける漢字の地位」、井上円了「国字改良論の三大誤」「漢学存廃問題に就て」『漢字不可廃論』など

- 結局、漢字は廃止されなかったが、1903年の国定教科書、日露戦争期の新聞の普及（ジャーナリストが国家に言文一致体の範を示すよう求める）などにより、言文一致体が徐々に普及。ただし、こうした政策は確定した言文一致体を求めるものであって、言葉のたえずの変化・更新を重視する本来の言文一致運動とは趣旨が異なる点に注意せねばならない。

#### ○ 社会主義者の言文一致運動

幸徳秋水「言文一致と新聞紙」『新文』第一巻第二号、1901.5.20

我等は全国の新聞紙に向つて、挙つて言文一致の文章に改められんことを希望に堪へぬ、せめては新聞紙の三面記事、即ち所謂軟派の記事だけでも、盡く言文一致にして貰ひたいのである。是れ独り我等言文一致を主張する者ばかりの希望でなく、恐らく三面記事の読者全体の希望であらうと信ずる、否な新聞紙自身の目的利益の点から言ても、何故に彼等は早く之を実行しない歟を怪しむのである。

堺利彦『言文一致普通文』1901

二十世紀の第一年、即ち明治三十四年において、日本の社会が正に機運に向つてゐる所の、尤も大なる改良事業はと問はゞ、必ず先づ「言文一致」と答へねばなるまい。

- 書簡から言文一致を実現していくことを説くもの。

- 国家の提示する言文一致よりも、文学者の言文一致運動が勝利を収めたのはなぜか？

#### VI-4 言文一致体の形成——文法に反して

言文一致体……あるひとつの文体（スタイル）

逍遙、同前

文ハ思想の機械なり、また粧飾なり。小説を編むにハ最も等閑にすべからざるものなり。脚色いかほどに巧妙なりとも、文おさなけれバ情通ぜず、文字如意ならねバ摸写も如意にものしがたし。支那および西洋の諸国にてハ言文おほむね一途なるから、殊更に文体を選むべき要なしと雖も、我国にてハ之に異なり。文体にさまぐの差異ありて、各一失一得あり、利不利、その用ひどころによりて異なる由あり。是小説に文体を選まざるべからざる所以なり。

- 日本では言と文は一致していない。よって文体の探究が必要。

俗語にハ七情ことへく化粧をほどこさずして現はるれど、文にハ七情も皆紅粉を施して現はれ幾分か実を失ふ所あり。

- 雅文と俗語の違い。

#### ○ 泉鏡花「外科室」1895

「看護婦、メスを」

「ええ」と看護婦の一人は、目を睨りて猶予えり。一同斉しく愕然として、医学士の面を瞻るとき、他の一人の看護婦は少しく震えながら、消毒したるメスを取りてこれを高峰に渡したり。

医学士は取るとそのまま、靴音軽く歩を移してつと手術台に近接せり。

看護婦はおどおどしながら、

「先生、このままでいいんですか」

「ああ、いいだろう」

「じゃあ、お押え申しませう」

医学士はちょっと手を挙げて、軽く押し留め、

「なに、それにも及ぶまい」

謂う時疾くその手はすでに病者の胸を掻き開けたり。夫人は両手を肩に組みて身動きだもせず。

かかりしとき医学士は、誓うがごとく、深重厳肅たる音調もて、

「夫人、責任を負って手術します」

ときに高峰の風采は一種神聖にして犯すべからざる異様のものにてありしなり。

「どうぞ」と一言答へたる、夫人が蒼白なる両の頬に刷けるがごとき紅を潮しつ。じつと高峰を見詰めたまま、胸に臨めるナイフにも眼を塞がんとはなさざりき。

と見れば雪の寒紅梅、血汐は胸よりつと流れて、さと白衣を染むるとともに、夫人の顔はもとのごとく、いと蒼白くなりけるが、はたせるかな自若として、足の指をも動かさざりき。

ことのここに及べるまで、医学士の挙動脱兎のごとく神速にしていささか間なく、伯爵夫人の胸を割さくや、一同はもとよりの医博士に到るまで、言を挟むべき寸隙とてもなかりしなるが、ここにおいてか、わななくあり、面を蔽うあり、背向になるあり、あるいは首を低るるあり、予のごとき、われを忘れて、ほとんど心臓まで寒くなりぬ。

三秒にして渠が手術は、ハヤその佳境に進みつつ、メス骨に達すと覚しきとき、

「あ」と深刻なる声を絞りて、二十日以来寝返りさえもえせずと聞きたる、夫人は俄然器械のごとく、その半身を跳ね起きつつ、刀取れる高峰が右手の腕に両手をしかと取り纏りぬ。

「痛みますか」

「いいえ、あなただから、あなただから」

かく言い懸かけて伯爵夫人は、がっくりと仰向きつつ、凄冷極きわまりなき最後の眼に、国手をじつと瞻りて、

「でも、あなたは、あなたは、私を知りますまい！」

謂うとき晩し、高峰が手にせるメスに片手を添えて、乳の下深く掻き切りぬ。医学士は真蒼になりて戦きつつ、

「忘れません」

その声、その呼吸、その姿、その声、その呼吸、その姿。伯爵夫人はうれしげに、いとあどけなき微笑を含みて高峰の手より手をはなし、ぼったり、枕に伏すとぞ見えし、肩の色変わりたり。

そのときの二人が状、あたかも二人の身边には、天なく、地なく、社会なく、全く人なきがごとくなりし。

→ 雅俗折衷体

## ○ 二葉亭四迷「あひゞき」(改訳) 1896 (ツルゲーネフ)

秋は九月中旬の事で、一日自分がさる樺林の中に坐つてゐたことが有つた。朝から小雨が降つて、その霽間にはをりへ生暖な日景も射すといふ気紛れな空合である。

(1888年の初訳)

秋九月中旬といふころ、一日自分がさる樺の林の中に座してゐたことが有つた。今朝から小雨が降りそゞぎ、その晴れ間にはおりく生ま暖かな日かげも射して、まことに気まぐれな空ら合ひ。

→ 名高い言文一致体。過去形および「である」に注目。文法と文脈。

逍遙「我国にていにしへより小説に用ひ来りし文体ハ一定ならねど、要するに雅と俗と雅俗折衷の三体の外にハあらず」。

Cf. 泉鏡花「小説文体」1898

僕は雅俗折衷も言文一致も、兩方やつて見るつもりだが、今まで経験した所では、言文一致で書いたものは、少し離れて見て全軀の景色がぼうツと浮ぶ、〔雅俗折衷の〕文章だと近く眼の傍へすりつけて見て、景色がぢかに眼にうつる、言文一致でごとくと細かく書いたものは、近くで見ては面白くないが、少し離れて全軀の上から見ると、其の場の景色が浮んで来る、油繪のやうなものであろうか、文章で書くとそれが近くで見てよく、全軀といふよりも、一筆々々に面白みがあるやうに思はれる、是れはどちらがよいのか悪いのなか、自分は兩方やつて見るつもりだ。

### ○ 島崎藤村「破戒」1906

『そんなら、君、あの瀬川丑松といふ男に何処か穢多らしい特色が有るかい。先づ、其からして聞こう。』と銀之助は肩を動つた。…

『穢多には一種特別な臭氣におひが有ると言ふぢやないか一嗅いで見たら解るだらう。』と尋常一年の教師は混返すやうにして笑つた。

『馬鹿なことを言給へ。』と銀之助も笑つて、『僕だつていくらも新平民を見た。あの皮膚の色からして、普通の人間とは違つて居らあね。そりやあ、もう、新平民か新平民で無いかは容貌かほつきで解る。それに君、社会から度外よのなかにされて居るもんだから、性質が非常に僻んで居るサ。まあ、新平民の中から男らしい毅然した青年なぞの産まれやうが無い。どうして彼様な手合が学問といふ方面に頭もちあを拾もちあげられるものか。其から推したつて、瀬川君のことは解りさうなものぢやないか』

…

…其時に成つて、初めて丑松も気がついたのである。自分は其を隠蔽さう隠蔽さうとして、持つて生れた自然の性質を銷磨して居たのだ。其為に一時も自分を忘れることが出来なかつたのだ。思えば今迄の生涯は虚偽の生涯であつた。自分で自分を欺いて居た。あゝ——何を思ひ、何を煩ふ。『我は穢多なり』と男らしく社会に告白するが好いではないか。斯う蓮太郎の死が丑松に教へたのである。

### ○ 武者小路実篤「お目出たき人」1911

自分はどうもたゞの空想家らしく思へていけない。何事も出来ず。これはと云ふ面白いこともせず。さうして天災で若死するやうな気がする。これも空想だらうと思ふが、自分は雷か、隕石にうたれて死ぬやうな気がする。

さもなければ肺病になつて若死するかも知れない気がする。どうも自分はなが生しないやうな気がする。しかしさうかと思ふとなが生出来さうな気もする、中々死にさうもないと思ふ。しかし天災、中でも雷と隕石があぶない

…

自分は誰かと結婚しない間は淫欲に誘惑される時手淫に逃れて行かうと思つてゐる。自分は手淫もせず、女も知らずに立派に生活をしてゐる人を知つてゐる。又さう云ふ生活の出来得ることを信じてゐる。自分は人間の意志の力。理性の力を知つてゐる。しかし自分は可なり強いストラuggleの結果手淫を正当なものだと信ずるに至つた。後でメチニコフもさう云ふ考を持つてゐると云ふことを友から聞いて力を得た。しかしこのことが後ろぐらい。自分の後ろぐらいことの殆んど唯一のものだ。蒙まがさうなことを考へ、又云ふ時、自分の心の内に『汝、手淫する者よ』と云ふ声が聞える。自分はこの後ろぐらい所をなくす為にも実は早く鶴と結婚したく思つてゐるのだ。

Cf. 宇野浩二「『私小説』私見」1925

武者小路実篤氏の小説は、当時であつては、文壇の他の小説と比べると、まるで小説の体になつていなかったともいえるのである。それは何のことはない、近頃流行している子供の自由画を文章にしたやうなものだつた。…彼の小説はだから従来の小説と比べて読むよりも、私たちが小学校や中学校でやつて来た作文を思わせるやうなものだつた。無論、一読して、文中に出てくる「自分」という主人公は作者その人であると思われた。そして、その「自分」がこ

う思った、「自分」がこう見た、「自分」がこういった、…ということが、今迄の小説とは全く違った、自由画の作文のような書方で書いてあるのだった。

→ 言文一致体の完成者、武者小路実篤。

○ 大杉栄「僕は精神が好きだ」1918

僕は精神が好きだ。しかしその精神が理論化されるとたいがいはいやになる。理論化という行程の間に、多くは社会的現実との調和、事大的妥協があるからだ。まやかしがあるからだ。

精神そのままの思想はまれだ。精神そのままの行為はなおさらまれだ。生まれたままの精神そのものすらまれだ。

○ 同「社会的理想論」1920

人生は決して、予め定められた、即ちちやんと出来あがつた一冊の本ではない。各人が其処へ一字々々書いて行く、白紙の本だ。人間が生きて行く其事が即ち人生なのだ。

労働運動とは何んぞや、と云ふ問題にしても、やはり同じ事だ。労働問題は労働者にとつての人生問題だ。労働者は、労働問題と云ふ此の白紙の大きな本の中に、其の運動によつて、一字々々、一行々々、一枚々々づゝ書き入れて行くのだ。

観念や理想は、それ自身が既に、一つの大きな力である。光りである。しかし其の力や光りも、自分で築きあげて来た現実の地上から離れゝば離れる程、それだけ弱まつて行く。即ち其の力や光りは、其の本当の強さを保つ為めには、自分で一字々々、一行々々づゝ書いて来た文字其物から放たれるものでなければならない。